

近現代日本における宗軍関係 (Religion-Military Relations)

—陸海空自衛隊員に対する半構造化ヒアリング調査を通して—

藤巻 恵誠

本研究で扱う「宗軍関係」とは、筆者が英語の「Religion-Military Relations」を「宗教と軍隊・武人との関係」あるいは「宗教と軍隊・武人との相互作用」を意味するよう日本語へ翻訳したものであり、文字配列は「政軍関係(国家と軍隊との関係: Civil-Military Relations)」に倣った。

古来、八幡大菩薩信仰や、軍神としての「武甕槌神」「経津主神」への崇拝に見られるように、宗教と武人・軍隊(武士・軍人)の間には、密接な関係が築かれてきた。また、江戸中期頃に書かれた書物『葉隠』の一節で語られるように、「死」が身近であった武士が何とか生き残れるよう神仏の加護を賜るべく祈っていることから、神仏に対する篤い信仰が窺われる。

一方、2023 年 1 月現在の陸海空自衛隊では、第二次世界大戦以前への反省もあり、部内で宗教的行為を執行する聖職者や僧侶の活動を認めておらず、宗教要員の職種(兵科)を設けていない。しかしながら、現実には自衛隊内において様々な宗教的行為が行なわれ、宗教施設の存在が確認されている。

他方で、自衛隊・民間双方における宗教と自衛隊に関する宗軍関係についての研究は、ほとんど行われてこなかった。また、宗軍関係と密接に関連する政教分離についての議論・研究においても、宗軍関係が意識されることはなかった。

そこで、本論文は、近現代日本の軍事組織(大日本帝国陸海軍および陸海空自衛隊)において、構成員の宗教的関心もしくは宗教的回心が実際のどの程度存在し、どういった経緯で芽生え構成員の言動にどの程度影響を与えているのか。また、1つの社会としての自衛隊の部隊組織や隊員個人の内面に宗教が与える影響とは実際どういったものがあるのかを探った。

まず、第1部では、文献調査によって、軍隊社会や自衛隊社会の概要、一般人から軍人になる再社会化過程および理想的軍人像への成長過程と宗教の関係、そしてその比較対象として、世界

各国における宗軍関係の傾向や米軍における Military Chaplain についての調査を行なった。結果として、自衛隊以外では、軍隊社会・軍人個人ともに宗教と密接な関係を築いていることが明らかとなった。

次の第2部では、半構造化ヒアリング調査によって、自衛隊員の宗教意識について、非現役の陸海空自衛隊員に対する調査を実施した。対象者は非現役(予備役・退役)の陸海空自衛隊員計7名である。予め作成していた16項目の質問項目に原則則ったが、状況に応じて自由に質問内容を変更した。そして、詳細なヒアリング調査を行ない、約1400分におよぶデータを得た。

収集したデータからは、死生観・宗教観・敢闘精神などに調査対象者それぞれの宗教的背景からの影響が見られ、調査対象者の「軍人としての自己」、あるいは「職業軍人意識」形成には宗教的なものが深く関わっていることが推察された。また、調査対象者からは、自衛隊員個人が何かしらの信仰を(大小の程度はあれど)持つことは必要だという声もあがった。

インタビューの中で、一部の調査対象者からは、宗教団体、特に反自衛隊的な姿勢を持つ団体や宗教者を警戒する声が聞かれたが、神道や仏教(日本の在来仏教)そのものに対しては好意的であるなど、伝統的な宗教に対する心的抵抗感の無かった。また、むしろ、有事の際の隊員への精神的ケアを行なう存在としての従軍宗教者の存在を求める調査対象者の意見が確認された。

なお、一部の調査対象者に靖国神社についての思いを尋ねた際には、靖国神社に祀られている先人への高い崇敬の思いが聞かれた一方で、一部の設問への回答では「国」の定義を巡って、「クニ(国家)」への忠義と「クニ(地域)」への思慕の「相剋」が垣間見られた。

以上、第1部と第2部の調査結果からは、特に、宗教的素養の涵養が軍人としての再社会化過程および理想的軍人像への成長過程で重要な役割を果たしていることが示唆された。